

## 最近はこんな病気も予防できます

多くのご両親は、子供さんが発熱したときに、突然重症になったりしないか、後遺症を残したりしないか心配されるのではないのでしょうか。このような状態をひきおこしてしまう病気の一つに細菌性髄(ずい)膜炎があります。小児の細菌性髄膜炎は現在でも、死亡率約5%、後遺症が約30%に上がる重篤な細菌感染症です。原因菌は、乳幼児ではインフルエンザ菌が約60%、肺炎球菌が約30%を含めます。

最近、この髄膜炎を予防するワクチンが許可され、接種できるようになりました。平成20年12月にHib(インフルエンザ菌)ワクチンが発売され、さらに今年の2月には肺炎球菌ワクチンが発売になりました。いずれも海外ではすでに普及しているワクチンで有効性の高いことが示されています。Hibワクチンは乳児～4歳児、肺炎球菌ワクチンは乳児～9歳児が対象とされています。現在のところは任意接種で有料のワクチンですが、かかりつけの医療機関と相談のうえ、接種をご検討ください。

また最近、子宮頸(けい)がんを予防するワクチンも発売されました。子宮頸がんは性交渉に伴うヒトパピロ - マウイルス(HPV)の感染が原因で20～30代に多く発症する疾患です。子宮頸がんワクチンはHPV感染を防ぐワクチンです。したがって対象年齢は性交渉の機会に乏しい10代が理想とされています。このワクチンも任意接種で有料ですが、かかりつけの医療機関と御相談のうえ、接種をご検討ください。

平成21年5月

平山 謙